

原発地元の未来をいっしょに考えよう
対話集会の質疑応答

2014年7月20日

筒井哲郎・律子

1. 日時：2014年7月20日 16:00~17:00

2. 場所：東海村 中丸コミュニティセンター

3. 状況：当日14:30~15:50の間、朴勝俊さんの標題の講演が行われた。

講演の主旨は、「地元の人たちは、原発をやめた方が良いことは十分わかっている。しかし、雇用が失われることを心配して、再稼働を望んでいる人が多い。したがって、雇用問題・経済問題の解決の道筋を見出すことが大切だ。そのためには、両方の立場の人々の対話を促進しよう」というもの。その空気の中で、様々な人たちの自由な発言があった。出席者は、約100名。

主催：朴勝俊先生のお話を聞く会、後援：東海村

4. 対話内容

A: 私は放射線測定ボランティアをしています。この地域でも結構高い所があります。地上50センチで $1\mu\text{Sv/h}$ とか。海沿いは高いです。事故があっても放射線の被害をなるべく受けないようにしようとしたら、畑は水耕栽培に切り替えるとか、屋根のあるものにするとか。木は切ってしまった方がいいです。(聴衆の驚きの反応に対し)木のあるところは放射線、本当に高いんですよ。

B(日立で元原発関連の仕事従事)：これから何年も廃炉作業に携わる技術者、若い人材をどうやって確保していけばよいと、お考えでしょうか？

朴：原発推進側と反対側が対立して接点がないという状況から、何とか1割でも2割でも意見一致できる部分を基にして、この問題をどうにかしようという所からやってみないでしょうかね。話してみると推進側に悪い人はいない、という感じがします。

村上元村長：原子力推進は国策だったのです。再生エネルギーの話を出すだけで反原発派とみなされ、圧殺されてきました。我々には議論する場がなかったのです。感情論で圧殺されました。(拍手)

C(元原子力関連メーカー勤務)：私は仕事に誇りを感じてきました。今は使用済み核燃料の問題はマイナスだと思っています。朴先生は大飯原発をモデルにした原発事故被害

試算を最悪 460 兆円と出されたということですが、福島の被害試算はどのくらいになるでしょうか？

朴：その数字はそれ以前、すなわち 2003 年の前、50 年間の実績から出した数字ですので・・・。

D(元、日立で溶接の仕事に従事)：廃炉の場合、鉄を切ったりしてもこの鉄は売れないわけですから、廃棄物はどんどん増えます。廃炉でも増える、再稼動したらもっと増える。作業者は放射線を浴びるしかありません。防護服は内部被ばくに対しては効果があるかもしれないが飛んでいるものに対しては効かないのです。

E：私はドイツに行ったことがないので、お聞きしたいのですが、この日本でドイツのように脱原発がうまくいくのかどうか。ドイツと日本の違いは何でしょうか？

G(地元議員?)：ドイツは隣がフランスで、フランスでは原発が発電量の 70%以上ですから、いつでもそこから買える、という地理的なものがあります。

H(小売店関連)：今、世の中は反原発の発言には拍手、推進にはブーイングですが、先ほどのような元村長への拍手は我々には無言の圧力となります(拍手)。

この地域をどうしたらよいのだろうかという話ができれば、我々の仲間も今日のような会合にもっと出てくると思います。原発で働く人たちが落とすお金で生きている者は切実です。後、数か月したら廃業してしまう旅館が出てきます。この地域をどのようにしたらよいのか。たとえば、ここのきれいな海とひたち海浜公園を結びつけて観光客に来てもらうとか。

東海村には、運動公園やサッカー場や屋内運動場などがけっこうある。けれども、あちこちに総花的に作ってきたために、公式競技に使えない中途半端な作りになっている。隣町を含めれば結構イベントができる施設がある。したがって、隣接市町と共同でイベントをやって、夏休みの児童生徒たちが泊りがけで遊びに来てくれるような方策を考えて欲しい。

相沢村議会議員：私は原発はやめるべきだと思っています。菜種栽培を中心にした、農・工・商の連携をして、ひとつの産業を起こすことを目指している。政治を志したのもそういう社会の有り様を変革していくためだ。